

氏名（本籍）	林田 一輝（大阪府）
学位の種類	博士（健康科学）
学位記番号	甲第 30 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 16 日
学位授与の条件	学位規則第 17 条第 1 項 該当
論文題目	Sharing responsibility and goal with a co-actor change the causal attribution of action-effect (他者との責任および目的の共有は行為結果の因果帰属を変化させる)
指導教員	教授 森岡 周
論文審査委員	主査 准教授 岡田 洋平 副査 教授 松尾 篤 副査 准教授 冷水 誠

学位論文の要旨

【背景】

人間社会においては、ある行為とそれに伴う結果の適切な因果帰属に基づいて円滑な社会的行動が制御・調整されている。（研究 1）他者との責任共有はしばしば因果帰属の低下，すなわち，責任転嫁をもたらす，医療現場においては人命に関わる重大な問題を引き起こす．先行研究では，主体者がその結果を制御できる確率が低下する，つまり誰による結果なのか，その原因が曖昧になることで，責任帰属が低下することが明らかとなっている．しかしながら，自己と他者の両方が結果の原因であることが「明白」な状況であっても，責任転嫁が起こるかは不明である．（研究 2）目的共有による協力動作は，パフォーマンス向上に向けて，自他の行為結果に互いに影響し合う．近年の理論研究において，目的共有が行為結果の因果帰属を増幅させる可能性が提案されているが，その実際は明らかでない．

【目的】

本研究の目的は，行為結果の原因が自己であることが明らかな状況において，責任共有は因果帰属を変化させるのか（研究 1）および目的共有は因果帰属を変化させるのか（研究 2）を因果帰属の指標である temporal binding (TB) という実験手法を用いて検証することである．

【方法】

TB 課題において，参加者はキーを押すように指示され，そのキー押しから少しの時間遅延後に音が鳴った．キー押しと音との間にどれだけの時間遅延があったかを推定することが求め

られた。この時間遅延が短く感じる程、行為（キー押し）と結果（音）の因果帰属が高いことを示す（TB 効果）。（研究 1）参加者は健康成人 19 名。参加者の行為結果に対して責任感を感じさせるために、第三者に大きな金銭的損失を与える **High harm** 条件と小さな金銭的損失を与える **Low harm** 条件、損失を与えない **Baseline** 条件の設定をした。なお、**High harm** 条件における TB 効果の減少は、第三者の損害は自分のせいではないという因果帰属の低下が生じていることを表す。TB 効果に及ぼす他者の存在の影響を調べるために、キー押しが参加者のみの **ALONE** 条件、またはキー押しが参加者と他者（実験者）の **TOGETHER** 条件の実験条件を実施した。これらの条件間では「行為が共有されているかどうか」という点だけが異なっており、結果の原因が参加者であることは明白な状況であった。（研究 2）二人一組の 26 ペアが参加し、目的を共有する協力群 13 ペアと共有しない独立群 13 ペアにランダムに分けられた。参加者はキー押しのタイミングによって運動精度の向上が求められる課題に TB を融合した実験課題を遂行した。

【結果】

（研究 1）**High harm** 条件×**ALONE** 条件では **Baseline** 条件と比較して推定時間が有意に短縮（TB 効果増大）した。一方で、**High harm** 条件×**TOGETHER** 条件では推定遅延時間が **Baseline** 条件よりも有意に延長した（TB 効果減少）。（研究 2）独立群と比較して協力群において運動精度と TB 効果が有意に増大した。

【結論】

研究 1 より、責任帰属低下のメカニズムは、行為結果の原因の曖昧化だけでなく、他者との行為共有であることが示唆された。他方、研究 2 より、目的共有が因果帰属を増幅させることがわかった。これらのことから、共有対象によって社会的行為における因果帰属が変容することが示唆された。